

認定NPO法人 日本紛争予防センター 2012年1月24日発行/No.21

JCCP NEWS

Vol.07 Iss.03 & 04 (合併号)



マケドニアのペトロバツ部で小学生約120人が参加し、行われた大規模な植林イベント。
民族は違っても同じマケドニアの仲間である意識が深まった。

CONTENTS

P.2-3 … 特集『**和解をすすめる**』

P.4-5 … 南スーダン：「子どもと若者への啓発・職業訓練事業」完了報告

P.6 … ケニア：アフリカの平和を担う軍、警察、文民の訓練/ソマリア：治安の改善に向けた取り組み

P.7 … トピックス：JCCP事業報告会/JCCP南スーダン事務所がテレビに登場/『職業は武装解除』発売中/ご支援へのお礼
総会開催のお知らせ

P.8 … プロジェクト一覧/新任スタッフからのご挨拶/JCCPカレンダー/ご支援のお願い

暴動から逃れて避難し、別の土地に移住したケニアのリフトバレー州の人々。移住先でも元から住んでいた住民との関係が課題になることも。



特集：『和解をすすめる』

紛争が終わっても人々の心に残る壁

民族の違いが原因で紛争を経験した人々にとって、紛争後に、同じ地域に住む異なる民族の住民がともに協力して、平和な社会を築くことが重要です。しかし、かつて争った人たちが互いに理解し和解するためには、困難な道のりを乗り越えなければなりません。

紛争が終結しても、対立した民族やグループがそれぞれ分かれて生活している環境では、交流は限られており、お互いに対する理解が十分ではありません。そのため誤解、偏見、敵対心などが生まれ、選挙など大きなイベントがきっかけで、衝突や紛争に発展してしまう危険があります。

JCCPは、異なる民族の人々がお互いに交流する機会を設けたり、紛争などで心に傷を負った人たちへ心のケアを行ったりすることで、和解への第一歩を踏み出す機会を支援しています。

和解をすすめるプロセス

◆ 異なる民族・グループ間の交流を促す 【マケドニア】

民族間の紛争が終結してから10年が経過したマケドニアは、現在表面的には安定しており、民族間の衝突はほとんどありません。しかし、互いの民族交流は非常に限られています。そのため、他の民族に対して10年前の内戦に関連する否定的な印象が強く残っています。

JCCPは、2010年2月から、異なる民族の子どもたちが共同で街の清掃活動や植林活動を行い、民族間の交流を促進する事業を実施しています。マケドニアの将来を担う子どもたちが、交流を通じて他の民族の生徒と協力した自らの経験を得て直接相手のことを知ることで、過去の紛争に基づく否定的なイメージに影響されることなく、異なる民族の住民とも協力して平和な社会を築くことを目指しています。¹

JCCPが2011年7月に実施したマケドニア系住民、アルバニア系住民、ロマ系及びトルコ系住民などの少数民族を対象としたアンケート調査では、「他民族と交流するイベントに機会があれば参加してみたいですか?」との質問に、85%以上が参加してみたいと答えており、このような活動に興味を示す住民が多いことが判りました。他方、「過去半年の間に、他民族と交流するイベントに参加したことがありますか?」との質問に、実際に参加したことがあると答えた人が35%程いる一方で、およそ半数の人は一度も参加したことがありませんでした。

このように他の民族と交流するイベントに興味はあるものの、実際には参加したことがない住民が多くいることから、異なる民族間の交流の機会を提供することを通じて、民族間の相互理解を促進する意義は高かったと考えられます。

【ケニア】

ケニアのリフトバレー州もマケドニアと同じ問題を抱えています。大統領選挙後の暴動で、国内避難民(IDP)となった人たちと、避難先の土地に元から住んでいた人たち(ホスト・コミュニティ)の間には差別や偏見など大きな壁がいまだに残されています。そこで、JCCPは避難民とホスト・コミュニティの人たちが共同でヤギ、羊、鶏などの家畜を飼育して、経済的に自立しながら住民同士が交流し、相互理解が深められる機会を作りました。その結果、同じコミュニティでもこれまで親交のなかったグループの人たちを自分たちの宗教的なお祭りに招待し合ったり、グループ間での結婚が行われるようになったりと、交流と和解が進み始めています。

国内避難民のモニカ(仮名)も家畜の飼育に参加した一人です。シングルマザーの彼女には子ど



マケドニア：民族交流のための植林活動



マケドニア：皆で協力して自分たちの街を清掃



マケドニア：絵画や折り紙などのワークショップも楽しみながら交流

もが6人おり、自身もエイズに感染していました。生活に困窮していた彼女は、家畜飼育のチームが共同で貯蓄したお金を借り、野菜を売る商売を始

めました。その結果、経済状態が改善し自信を取り戻した彼女は、避難民キャンプの外の人ともうまく付き合えるようになったと言います。このよう

な交流が、和解の第一歩として今後さらに続いていくことを期待しています。²

◆ 傷ついた心をケアする

貧しい住民たちがひしめき合って暮らしているマザレ・スラム³では争い合った住民たちが隣りあわせで生活を続けていますが、異なる民族の住民間の交流は限られています。このため、暴動の加害者と被害者の間では、謝罪や和解はほとんど行われていませんでした。

暴動の被害者と加害者、そして異なる民族間で和解を進め、同じ地域の住民が互いに協力していけるような社会を築くためには、暴動によって被害を受けた住民への支援を行うことは必要不可欠です。例えば、暴動の際に性的被害を受けた女性、暴動被害のトラウマを抱えた人たち、暴力被害から受けたトラウマやストレス、孤独感等から薬物に依存するようになってしまった住民など、心理社会的ケアを必要とする人たちがいます。

JCCP はマザレ・スラムに住む有志の若者で構成される地域住民組織（CBO）に対して暴動被害に遭った子どもたちに対する心理社会的ケアを行う技術の訓練を行いました。子どもたちを通じ、暴動虐待を受けた子どもの多くが同時に薬物依存

の問題を抱えていることが判ったため、薬物中毒者に対するカウンセリング技術のトレーニングも実施し、薬物依存者に対するサポートも開始しました。今では、有志の若者たちの元に、心の問題やトラブルを抱えた住民が相談に来るようになりました。暴動中に隣人の家財道具を盗んでしまい、謝罪もできずにいた住民たちの間を取り持って、和解を仲介することもあります。「夜中に相談の電話がかかってくることがあるんだ」と苦笑いしながらも、自分の生まれ育ったスラムの再生に貢献できるスキルを身につけられたことが嬉しい、と若者たちは語ってくれました。⁴

【カウンセリングの事例】

一方、被害者だけでなく、加害者も大きな心の闇を抱え続ける場合があります。アンディ（仮名／36歳）は、故郷を追われてマザレ・スラムで暮らしていました。彼は暴動中に女子学生をレイプしてしまい、罪を償ったあとも、家族をはじめコミュニティから拒絶されてしまったのです。アンディは自己否定感にさいなまれ、薬物に溺れて暮らしていました。彼に対し、コミュニティ・カウンセラーのパメラは辛抱強くカウンセリングを続けました。

パメラはアンディの心の悩みを聞くだけでなく、貯金することを勧めるなど、経済的な生活基盤を整えることに関しても幅広く助言を行いました。アンディは気持ちが安定しだすと建設の仕事に就き、謝罪の気持ちから教会へも行くようになりました。しかし、薬物の影響から解放され生活基盤が整っても、家族から拒絶されていることへの自己否定感容易に消えませんでした。そこで、パメラは自らアンディの家族に会い、彼が心を入れ替えて今は立派に自立していることを家族に説明しました。何度かパメラとの話し合いを続けた結果、家族はアンディが去年のクリスマスに家に戻ってくることを許したのです。家族に受け入れられたアンディはようやく心の平安を取り戻すことができました。

加害者の更生は極めて扱いが難しい問題です。JCCPは、被害者の支援を優先しながら、心から反省と謝罪の意志がある加害者が更生のための一歩を踏み出す選択肢を持つことも中長期的な和解には必要と考え、その環境づくりに貢献していきたいと考えています。

¹ この事業は、外務省(日本NGO連携無償資金協力)の助成により実施しました。 ² この事業は、独立行政法人 国際協力機構 (JICA)の委託を受けて実施しました。 ³ マザレ・スラムは、ナイロビ市の東方に位置し、ナイロビ市第二の規模のスラムです。20万人弱の人々が生活しています。(2009年、国税調査) ⁴ この事業は、独立行政法人 国際協力機構 (JICA)の委託を受けて実施しました。



ケニア：マザレスラムの街頭で行われるグループカウンセリングの様子



ケニア：子どもたちを遊ばせながら、心に傷を持つ子を発見するためのセラピールーム

職業訓練の第1期に参加した訓練生たち。
講師を囲んで。



SOUTH SUDAN 南スーダン

職業訓練の様子をYouTube動画でご覧いただけます。
<http://www.youtube.com/user/JCCPchannel>

「子どもと若者への啓発・職業訓練事業」完了報告

JCCPが2009年12月より実施してきた南スーダンでの子どもと若者への啓発・職業訓練事業が、2011年9月15日をもって完了しました。22ヶ月間に渡って首都ジュバのストリートチルドレンと貧困に苦しむ若者に対して実施した事業を振り返ります。

子どもたちの安全を守るための啓発活動

◆ 内戦によって親を失った子どもたち

南スーダンが独立する前のスーダンでは、1983年から20年以上続いた南北の内戦によって約190万人が犠牲になったと言われています。2005年に内戦が終わり、2011年7月に南部が独立して南スーダン共和国となりました。国が未来への希望を取り戻した一方、首都ジュバでは、内戦によって両親を亡くしたり、貧しさから一緒に暮らせなくなったりした多くの子どもたちがストリートチルドレンとして路上で生活をする状態が続いています。暴行などの犯罪に巻き込まれたり、生き抜くために罪を犯したりしてしまう子どもたち。このままの生活が続けば、教育を受けられず、職にも就けず、生きていく術が分からず更に自暴自棄になってしまう可能性が高いのです。

◆ 身を守るための知識を学ぶ

路上生活を送る子ども・若者たちは親の保護を受けられず、またしつけも教育も受けられないために、自らの安全を守る方法や健康管理の知識がありません。このような子どもたちは空腹や不安を紛らすため危険性を知らずに薬物を吸引して中

毒になったり、食糧を得るために窃盗を犯したりしてしまうことがよくあります。また、その日食べるパンを買うために、一回100円程度で大人に自分の体を売ってしまい、罪悪感を紛らわせるためにアルコールに依存する女の子たちもいます。

JCCPは、彼らが自身の健康と安全を守り、社会的な生活を送る第一歩となるように、犯罪の回避、保健衛生、HIV/AIDS予防、性教育、薬物防止についての啓発活動を行いました。

◆ 自尊心を持って生きる

困難な状況にあって希望を失い、薬物に依存して現実から目を背け、一日中何もせずに過ごすストリートチルドレンたち。2010年からJCCPの啓発活動に参加していたジェームス(21歳)もその一人でした。ジュバ市内で暮らす彼は、他のストリートチルドレンと一緒に段ボールにくるまって路上で寝る生活で、日々の食事にありつくことができず、生きるために窃盗をすることもありました。そんな彼はJCCPの啓発プログラムに参加して変わりました。「自分自身に対する誇りを持つようになった」と言います。啓発プログラムを通

じて仲間とともに学び、信頼できるコミュニティ・モビライザー(啓発を担当するJCCP職員)と出会ったことで、彼は徐々に自暴自棄な生活から抜け出したいと願うようになり、自分自身の生活環境を改善し、真面目に仕事をしたいと将来への希望を語るようになりました。参加者が啓発を通して自身の生活を見つめ直し、将来への希望と自尊心を持てるようになったことは、新たな人生を歩むための大きな一歩になりました。

◆ 学ぶ意欲が芽生えた

ジュバ市内のハイマラカル地区のストリートチルドレン対象の啓発では、子どもたちの強い要望によって、簡単な英会話のクラスも開講しました。啓発プログラムが刺激となり、それまで路上生活で学ぶことに無関心だったりあきらめていた子どもたちが、自ら学ぶ意欲を持つようになったのです。エマニュエル(15歳)もその一人です。彼にとって、JCCPの啓発は人生で初めて受ける教育の機会でした。彼は啓発をきっかけに学ぶことに強い関心を持つようになり、今では現地NGOが実施している初等教育に参加しています。



啓発活動の様子。初めは落ち着いて座っていらなかった子どもたちも徐々に慣れた。



粘土アート制作。アートへの興味に目覚める子もいた。

◆ 自分の心を表現する

啓発の一環として、知識を吸収するだけでなく、粘土細工や絵画、音楽などを通して自分が抱える

問題や学んだことを外に表現するセッションも取り入れました。作品の展示会も開催し、自分の才能を発見したり、人に認めてもらう機会を経験した

ことで、子どもたちの自尊心の回復にもつながりました。

経済的に自立し、人生を立て直すための職業訓練

◆ 自立を目指して

ストリートチルドレンや貧困に苦しむスラム生活の若者を対象に実施した職業訓練では、ハウス・キーピングと調理補助の二種類の訓練を行いました。独立が決まってからジュバ市内で復興が進み、ホテルやレストランが増えていることから、就職先が確保できる確立が高い職種を選びました。訓練に参加したメアリーは17歳のシングルマザーでした。「私は学校に行くことはできなかったけど、自分の子どもにはしっかり教育を受けさせて私のようにならないようにしてあげたい」と言う彼女は、レストランに就職してお金を貯めることを目標に、熱心に訓練に取り組みました。

◆ 安全に眠れるシェルターの提供

職業訓練に参加する若者の多くは、路上生活をしているため様々な危険にさらされています。実際、訓練生の一人が路上生活をしているというだけで不当に警察に逮捕されてしまったこともありました。南スーダンでは警察の機能がまだ未熟であるため、

何か犯罪が起こるととりあえず近くにいるストリートチルドレンを逮捕するといったことも起こるのです。路上で寝ている間に酔っ払いや暴漢に襲われる心配から、十分な睡眠をとることができず、寝不足の状態です。警察に拘束された子どもはJCCP職員の交渉もあり解放されましたが、事件の再発を防止するため、JCCPはシェルター（簡易住居）の提供を実施しています。シェルターに入居した訓練生たちは、安心して眠れる場所ができて、訓練にも身が入るようになりました。

◆ 自分の力で生きる

職業訓練を修了した訓練生には、ホテルやレストランへの就職斡旋活動を行いました。2009年12月から2011年9月の間に、203名が職業訓練に参加し190名が訓練を修了、89名がホテルやレストランに就職働いています。南スーダンで一度も働いた経験のない若者たちを対象にしている職業訓練のなかでは、JCCP事業の就職率や就職先

の水準が高いとの評価を得ています。一方、就職が決まっても不満を感じるとすぐに辞めてしまう子どもたちもあり、就職率は50%前後にとどまっており、これから更に事業を改善するための教訓も得ました。

2012年12月からは、新たな職業訓練・啓発事業を開始します。将来的にJCCPがいなくなった後も、現地NGOや住民が活動を続けていけるよう、能力強化に重点を置く予定です。2年間の教訓を生かし、JCCPではスタッフによるカウンセリングや、先に就職した参加者によるガイダンスを開くことによって若者たちが長期的に同じ場所で働き続けることができるようなサポートを開始しました。途中でくじけそうになっても諦めず「就職して自家用を借りて社会の一員として生活していきたい」と願う多くの子ども・若者の夢の実現のために、これからもできる限りの支援を続けていきます。

*啓発活動と職業訓練は、JCCP会員や寄付者の皆様からのご支援と、特定非営利活動法人 ジャパンプラットフォームの助成、シェルターの提供は株式会社ユイット様からのご寄付により実施しました。

JCCPは2011年12月より新たな事業をスタートし、引き続き南スーダンの子どもや若者を支援していきます。



講師が時間を計り、短時間で正確にベッドメイキングができる様に訓練している



フルーツのカットを時間内にできるよう、時間を計って訓練している



支給されたエプロンを着て伝統料理のサモサの調理を実習している

アフリカの平和を担う軍、警察、文民の訓練



研修カリキュラムの署名式。石井由希子JCCP在ケニア代表(左)と、IPSTC研修カリキュラム作成の責任者、ジョイス・シティアネイ中佐

JCCPは、東アフリカの平和支援活動に従事する軍人や警察などの人材育成にも力を入れています。2010年2月から、ケニアのナイロビ市郊外にある国際平和支援訓練センター(IPSTC)で、武装解除・動員解除・社会復帰(DDR)、治安部門改革(SSR)、人権、性暴力対策などに関する研修の立案、教材作成、講師派遣を行っています。

現在、東アフリカ地域ではダルフール、南スーダン、ソマリアなどで平和支援活動が展開しています。これらの地域や国では、いずれも長い間の

内戦によって政治や経済が不安定で治安が悪化し、住民の日々の安全が脅かされています。こうした状況を改善するため、最前線に立って平和支援活動に従事する人々には、平和構築や紛争予防に関する専門的な知識と高度なスキルが求められます。JCCPは、国際平和支援訓練センターがこのような人々に対して、それぞれの地域や国に最適な方法で平和支援活動ができるように研修を支援しています。

JCCPからは、日本人職員4人を講師として派遣しました。

ソマリア

SOMALIA

治安の改善に向けた取り組み

◆ ソマリアの内戦と干ばつ

1991年から内戦の続くソマリアでは暫定政府(TFG)が殆ど機能しておらず、各地で武装勢力が力を保っているため、現在も無秩序状態が続いています。2011年初旬から東部アフリカで続いた干ばつは、特にソマリアで甚大な被害を出していますが、この状況にも内戦は深く関係してい

ます。無政府状態のソマリアでは、本来政府が行うべき灌漑設備の整備や、過剰な森林伐採の抑制などの干ばつ対策が一切取られていないからです。反面、雨が多く降った場合も、洪水になっています。アルシャバブをはじめとする反政府武装勢力によって、国際援助機関の干ばつ被害者への活動が妨げられていることも被害の拡

大に拍車をかけています。

JCCPはソマリアが国としての基盤を整えるためには、根本的な紛争の原因を解消することが非常に重要であると考えています。そのためソマリアでは国連機関や現地NGO等と連携しながら、コミュニティーの治安改善のための取り組みを行っています。

◆ 若者の犯罪を減らし、コミュニティとのつながりを強める取り組み

JCCPは2009年から国連開発計画(UNDP)と共同でソマリアのコミュニティーの治安改善のための事業を行っています。2011年8月からは、この試みの延長として、武装勢力やギャングなど犯罪集団に取り込まれ加害者となったり、予備軍となったりしている若者を対象に更生や除隊を支援するYouth at Riskと呼ばれる新たな事業をUNDP、国連児童基金(UNICEF)、国際労働機関(ILO)とが共同で開始しました。この事業では、対象となる若者が経済的に自立できるよう職業訓練を行ったり、コミュニティーとのつながりを強められるようスポーツなどの活動を行

い、若者の交流を深め無為に過ごす時間を減らし、犯罪に加担することが減るように支援しています。

この事業を将来的にソマリア人たちが自身で運営できるように、「紛争と暴力予防の監視団」という現地団体が創設され、職業センターを運営し、スポーツやコミュニティー活動を実施しています。JCCPは、「監視団」と日々活動を共にしながら、その能力強化を支援しています。寸劇や詩の朗読などを通じた平和教育活動を、各地を巡回して行うピースキャラバンを通じて行っており、JCCPは、民兵・犯罪者予備軍の若者の登録システム構築支援、「監視団」の運営管理、平和教育のための訓練マニュアル作成などを担当しています。

2011年11月時点で2009名の若者が首都モガディシオを含む4都市で登録され、うち730名が18歳未満の子どもです。ある11歳の男の子は、母親が内戦で亡くなり父とも生き別れ、身寄りもなく路上生活を送るうちに人からものを盗んで生きるすべを学び、今では3人のギャングチームのリーダーだと語りました。刑務所は少なくとも最低限の食事を得られるから嫌いではないけれど、自分のことをいつも心配してくれる知り合いのお婆さんがこの事業のことを知り、登録するように連れてきてくれた。そうつぶやいた彼のような若者たちに、別の生き方を提供できるように支援を続けていきます。



2011年9月にソマリア北部ブラオで行われたピース・キャラバン。平和についての劇に参加するため若者を中心に住民600名が集まった。

ケニア駐在員による事業報告会を開催しました

国際平和デー・スペシャルトーク「ケニア・ソマリア 住民の手で平和を築く方法」
2011年9月22日

東京広尾のJICA地球ひろばにて、在ケニア代表 石井由希子による事業の報告会を開催しました。前半は事務局長瀬谷ルミ子がソマリアの現状とJCCPの活動に関する発表を行いました。後半には石井がケニアのマザレスラムで行っているスラムの住民の心のケアを中心に事業の報告を行いました。スラムが抱える問題とJCCP

のプロジェクトについて知っていただき、その後のディスカッションの時間には参加者による活発な意見交換が行われました。参加した皆様からは「普段あまり知ることのないケニアやソマリアの様子が分かって興味深かった」「他の参加者と交流できたのも良かった」等のお声をいただきました。



講演を行った石井由希子代表



学生だけでなく、社会人の方もご参加いただきました。

「コミュニティ再生へのあゆみー自立と共生のために」

2011年11月24日

JCCPは2010年2月から2011年10月まで、ケニアで大統領選挙後の国内避難民とスラムコミュニティにおける共生プロジェクトを行いました。この事業では暴動によって住む土地を追われた国内避難民が、対立の多い避難先の住民と折り合い、経済的に自立できるよう支援しました。

この事業報告会は、現地でこの事業を担当した大

上博史プロジェクトマネージャによって実施されました。暴動終了後も民族間の対立が残る現実や、国内避難民キャンプやナイロビのスラムの人々の生活について写真を交えて報告しました。少人数のアットホームな雰囲気の中、活発な質疑応答が行われ、「非常に分かりやすく、リアルな話として聞けた」等のお声をいただきました。

テレビ東京の「地球VOCE」に南スーダン事業が取り上げられました

2011年11月18日

国際協力の現場を紹介する、テレビ東京の番組「地球VOCE」(11月18日放映)で、JCCP南スーダンの活動が取り上げられました。

南スーダンの首都ジュバには長年の内戦の被害に遭い、故郷から逃げてきたり、仕事や就学を求めてジュバに移動したものの、希望通りに就職や

就業ができず、路上生活者となってしまった子どもや若者が数多くいます。タレントのルー大柴さんのレポートによって、内戦の終結から6年経った今も、そのようなストリートチルドレンが多く住むジュバの様子が紹介されました。この番組で、ストリートチルドレンのための健康や衛生に関する啓発活動、将来就職に役立つように開

いた英語教室、職業訓練など、在南スーダン代表日野愛子を中心に取り組むJCCPの活動が紹介されました。

支援によって職を得た若者が、職場で使うために配られた靴を大事そうに磨きながら、将来の夢を語る姿が印象的でした。

『職業は武装解除』好評発売中!!

瀬谷ルミ事務局長による初の単著『職業は武装解除』(税込¥1,470)が9月20日に朝日新聞出版より発売されました。

瀬谷事務局長が紛争予防の仕事を志したきっかけ、その後の道のり、アフガニスタンやシエラレオネで兵士の武装解除の現場で直面した現実、現在JCCPがソマリア、南スーダン、ケニア、

バルカン地域で行っている活動とそこに生きる人々、紛争地から見える日本の今後について、ときにユーモアを交えながら分かりやすく書かれています。

発売以来多くのメディアで紹介され、多方面で好評を頂いています。まだお読みになっていない方、是非お手に取ってみてください。



ご支援へのお礼

- ◆アウトドア製品メーカーのパタゴニア日本支社様より、現場活動に役立つスタッフ用衣料品のご提供を頂きました。
- ◆MS&AD ゆにぞんスマイルクラブ様より、JCCPがマケドニアで行っている『多民族小学生による植林とワークショップ』事業のために助成金を頂きました。

いつも温かいご支援有り難うございます。この紙面を借りまして改めて厚く御礼申し上げます。

総会開催のお知らせ：第21回通常総会は3月15日(木)の開催を予定しています。議決権を有する正会員(賛助会員・支持会員)の皆さまには別途2月下旬にご案内をお送りいたします。総会の後には小川和久理事による講演会を予定しております。

JCCPのプロジェクト一覧 (2011年7~12月)

※事業開始順に記載しています。

事業名: 国際平和支援研修センター (IPSTC) への平和支援研修及び組織強化事業
事業地: ケニア
期間: 2010年2月1日~2011年9月30日
助成: 国連開発計画 (UNDP)

事業名: 南部スーダンにおける子どもと若者へのライフスキル向上支援事業
事業地: 南スーダン
期間: 2011年5月18日~2011年9月15日(第4フェーズ)
助成: 特定非営利活動法人 ジャパン・プラットフォーム (JPF)

事業名: 選挙暴動後のIDP及びスラムコミュニティにおけるCBO能力強化を通じた共生プロジェクト
事業地: ケニア
期間: 2010年2月20日~2011年10月31日
助成: 独立行政法人 国際協力機構 (JICA)

事業名: 民兵・犯罪予備軍の若者の社会復帰プロジェクト (Youth at Risk)
事業地: ソマリア
期間: 2011年8月~継続中
助成: 国連開発計画 (UNDP)

事業名: 異なる民族間の共存促進 / ペトバツ部の多民族の小学生と住民による共同植林とワークショップ事業
事業地: マケドニア
期間: 2011年1月25日~2012年1月24日
助成: 外務省・日本NGO連携無償資金協力

事業名: ジュバ市内におけるストリートチルドレンを支援する現地NGO及び現地政府の能力及びネットワーク強化事業
事業地: 南スーダン
期間: 2011年12月17日~2014年3月31日
助成: 独立行政法人 国際協力機構 (JICA)

新任スタッフからのご挨拶

在ケニア代表事務所 プロジェクト調整員
佐藤愛里子(さとう えりこ)

はじめまして。8月から在ケニア代表事務所調整員として赴任した佐藤愛里子と申します。ケニアにはこれで3度目の滞在です。英国の民間会社で働いた後、就労支援を行う社会的企業で勤務しながら、厚生労働省にて生活保護者やホームレスの自立支援政策

に取り組んできました。現在は、ナイロビのスラムで生活する人々の心のケアプロジェクトや国連・ケニア政府と連携した平和教育推進事業に従事しております。どうぞよろしくお願い致します。

JCCPカレンダー [講演会/セミナー] (2011年7~12月)

開催日	主催/イベント	テーマ		
7月1日	防衛省情報本部	ソマリア国内・海賊情勢 / スーダン情勢 ★	10月8日	アフリカ平和再建委員会 壊れた社会を立て直すために必要なこと ★
7月10日	宇都宮市平和のつどい	生きる選択肢を、紛争地の人々へ ★	11月7日	財)国際開発高等教育機構 平和構築と復興支援 ★
7月11日	早稲田大学	アフリカ紛争の現状 / 平和構築 ★	11月9日	防衛省防衛研究所 大規模災害における軍事組織の役割 ★
7月12日	UBS証券会社	女性のリーダーシップとキャリア形成 ★	11月18日	中央大学高等学校 アフリカの現状と日本~高校生へのメッセージ ★
7月13日	聖園女学院	今、国際平和に必要なこと ★	11月19日	群馬県立女子大学 生きる選択肢を、紛争地の人々へ ★
7月16日	桐生女性協議会	今、国際平和に必要なこと ★	12月5日	陸上自衛隊 JCCPの活動、南スーダンの現状 ☆
7月30日	EARTHLING2011	生きる選択肢を、紛争地の人々と、わたしたちへ ★	12月12日	信州大学経済学部 人道支援・平和構築 ☆
8月10日	札幌市教育委員会	武装解除の専門家が見た世界 ★	12月16日	日本能率教会 武装解除から自立までの道のり ★
9月21日	国際平和映像祭	基調講演 ★	12月20日	明治学院大学国際学部 平和のために働く: JCCPの活動から考える ☆
10月2日	大阪大学(GLOCOL)	フィールドは世界だ。グローバル人材の育成 ★		(講演者: ★ 瀬谷ルミ子事務局長 ☆ 安富淳事業統括次長)

ご支援のお願い

JCCPの活動は、皆様からのご支援によって支えられています。(JCCPは認定NPO法人です。JCCPへのご寄付は税額控除の対象となります。)

● 会員になる ● マンスリーサポーターになる ● 寄付をする ● 書き損じハガキを送る ● ボランティアをする ● JustGivingで寄付を集める

詳しくはお電話かメールでお問い合わせいただくか、JCCPのホームページをご覧ください。 www.jccp.gr.jp



認定NPO法人 日本紛争予防センター
〒112-0014 東京都文京区関口1-35-20 藤田ビル3F
TEL: 03-5155-2142 FAX: 03-5155-2143
E-mail: contact@jccp.gr.jp
URL: www.jccp.gr.jp

発行日 2012年1月24日
発行人 堂之脇光朗
編集人 瀬谷ルミ子
Volume 7 Issue 3&4 (合併号)

顧問 近衛忠輝 日本赤十字社社長
明石康 元国連事務次長
理事長 堂之脇光朗 元外務省大使
理事 入山映 サイバー大学客員教授
植村高雄 (特活)CULLカリタスカウンセリング学会会長
小川和久 危機管理総合研究所所長
瀬谷ルミ子 (特活)日本紛争予防センター事務局長
永井恒男 野村総合研究所(NRI)コンサルティング事業本部
監事 柴田秀孝 (株)エムアンドアール 顧問